

李得宰氏への手紙

『国民という怪物』に寄せられた書評「非『国民化』
の回路はいかに可能か」に対する応答

西川長夫

1

拙著の韓国版『国民という怪物』（原題『国民国家論の射程，あるいは<国民>という怪物について』柏書房，1998年）にかんして長文の書評を書いていただき，ありがとうございました。残念なことに私はハングルが読めないのですが，現在ソウル大学の大学院に在学している私の若い友人の浅羽祐樹さんが，『進歩評論』第18号（2003年冬号）に掲載された御高論のコピーとその翻訳（浅羽祐樹，吉田久美訳）を送ってくれました。私が御高論に対する返事を書くことに決めたのは，その翻訳を読んだ上でのことです。

私ははじめに，「国民化」の問題に焦点をあてて書評を書いていただけたことに，お礼を言いたいと思います。尹大石さんの訳で本書の韓国版が出版されることになったとき，タイトルを「国民という怪物」としたいというお話があって，私は即座に賛成しました。御承知のように日本で出版されたとき，本書の原題のメインタイトルは「国民国家論の射程」ですが，私はそれにあえて「あるいは<国民>という怪物について」という長い副題を付して，そこに自分の思いをこめようとしたのですが，韓国版の出版に際してその思いが通じたのはうれしいことでした。またとりわけ韓国で出版される場合には，近代における両国の関係の歴史と，私自身が朝鮮で生まれ育って，敗戦後に日本に引揚げ者として帰ってきたという自分史の問題にもかかわって，「国民化」の問題を意識せざるをえないという事情がありました。抽象的あるいは理論的な問題である以上に，私は自分の歴史的経験と生き方の問題として国民国家を論じたいという気持が強かったのだと思います。そのことは「韓国版の序」（原文は拙著『戦争の世紀を越えて』（平凡社，2002年）に記した通りです。

「怪物」という言葉をえらんだ理由の一つには，ホブズの「リヴァイアサン」が念頭にあったことも事実です。ホブズ以来，国家を怪物とみなすことはよく知られているが，しかし実は国民こそが怪物ではなかったか，そして現にそうだろう，という主張がこの副題にはこめられていました。戦時の兵隊や憲兵の蛮行だけでなく，銃後の，あるいは平時の国民の怪物性の恐ろしさを忘れることはできません。国民を民族と言いかえても同じことでしょう。同じnationの二つの訳語です。

もっとも，私はここで国民の問題を単なるイデオロギーや思想史の問題として取り扱いたくはなかった，ということもつけ加えておきたいと思います。ここで本書の冒頭に二つの表（「表1「国民統合の前提と諸要素」，表2「国民化（文明化）」）が置かれていることを思い出していただきたい。表1には，国民統合にかかわるさまざまな制度あるいは国家装置（国家の抑圧装

置とイデオロギー装置) が列挙されています。表 2 には国民化の五つの水準 ((1) 空間の国民化, (2) 時間の国民化, (3) 習俗の国民化, (4) 身体の国民化, (5) 言語と思考の国民化) が示されています。私の考えでは, これらはナショナリズム, したがって国民という怪物の誕生の前提条件です。この表 2 で私が強調したかったことの一つは, 国民は近代, つまり国民国家の時代に, 身体から感性や思考に至るまですべて新たに作られた, あるいは作り直された存在であり (それを私は「人造人間」などという不粋な言葉を使って表現しました), それ以前の人間とは, 歩き方も好みも感性や言語も根本的に異っている。そのような新しい人間を作り出すために, 近代の政府や行政機関, あるいは軍隊や学校がどれほどの労力と資金と, さらに暴力を投入したことが。こうしたことは今では (国民国家論の進展と浸透とともに), 歴史的事実としてほぼその全容が明らかにされています。もう一つ, この二つの表をあえて書物の冒頭に置いた大きな理由の一つは, ナショナリズムをはじめ, ナショナルなイデオロギーはすべて, それを生み出す具体的で物質的な制度や装置をもっており, そうした制度や装置との関連で考察しなければならない, 国民国家論とはそのようなものであることを余儀なくされているという考えを強調したかったからです。

2

李得宰氏は, 私の国民国家論のなかでフランス革命が特別の位置を占めていることを指摘されていますが, これは正しい指摘だと思います。ただそのことにかんしては少し説明が必要かもしれません。私がフランス革命にこだわる理由の第一には, 私がフランス近代の研究者なので, いわば自分の領域の問題として語れるという気楽さがあります。これは誰にでもある私的な理由です。だがもっと大きな歴史的な理由があります。日本の戦後思想史は, あるいはもう少し限定して, 日本の戦後歴史学はフランス革命の評価を中心に展開してきました。戦後の自由主義者たちは, フランス革命によって実現されたような自由な市民社会を実現すべきことを説いてきました。マルクス主義的な正統派はそれが戦後歴史学の主流でした, フランス革命からロシア革命を経て, やがて世界の社会主義革命が達成されるというオプティミスティックな未来像を描いていました。そこでその図式を日本の現実に適用しようとしたときに, 明治維新はブルジョア革命であるのか絶対主義革命であるのかといった論争や, 戦後の連続説と断絶説といった論争がアカデミズムの中心的な課題となる。したがって戦後歴史学を, 戦後歴史学のなかで根底的に問い直すためには, フランス革命や, さらに明治維新を根底的に問い直し, フランス革命や明治維新の神話から解放される必要があったのです。

このようなコンテキストのなかで先に述べた二つの表を読み直していただくと, それが戦後歴史学に対する大きな, そして根底的な挑戦であったことがわかりいただけだと思います。この表は初めフランス革命の諸事件と歴史的な過程を一つの表にまとめることから出発しています。そしてこの二つの表が明治維新にほぼそのまま適用できることが確認されたとき, 私にとっては初めて重要な意味をもち始めました。この表は, フランス革命の本質が国民と国民国家の形成であるという判断を前提としています。この表はまたフランス革命 (したがって明治維新の) 相対化と脱神話を意味しています。

昨年の十月ソウルで開催された第3回韓日歴史家会議は「ナショナリズム 過去と現在」をメインテーマとしており、韓国におけるナショナリズム研究の現状を知る上で、私にとってはきわめて貴重で有益なものでした。私はこの会議で、ソウル大学の崔甲寿教授の「ナショナリズムの起源と特性」と題する報告の指定討論者、つまりコメンテーターの役割を与えられたのですが、崔教授の報告原稿を読んでたいへん驚きました（もちろんうれしい驚きです）。崔教授のこの論考は、ネイションとナショナリズムにかんして私がこれまでに読んだどの論文よりも、説得的であっただけでなく、フランス革命とナポレオンにかんする解釈もまた私の見解と一致するものであったからです。例えば、次の文章。「彼の帝国は大革命が持った解放の契機が《富国強兵》の論理で閉まっていく閉鎖回路の役割をした。彼は確かに革命の継承者だったが、革命の可能性を当時のヨーロッパ国際秩序の基準に最もよく符合するように縮小したのである。これがまさに《国民国家》である。（・・・）《人権革命》の最も刮目に値する成果が《富国強兵》の論理として帰結したのは、近代性が持った矛盾ないし悲劇性の一断面であり、国民国家は未だに我々の生の基本フレームを提供してくれているのである。」（『報告書』2-3頁）

これを読んだとき、私は自分の二〇年ほど前の著作『フランスの近代とボナパルティズム』（岩波書店、1984年）以来、1989年の大革命二〇〇周年の学会やシンポジウムで主張し、その後は国民国家論としていくつかの著作で主張し続けてきたのは、まさにこのことであった、という印象をもちました。フランス革命やナポレオンにかんするこのような考え方は、フランスや日本でもまだ一般的とは言えません。私は韓国の学界や思想界の実状はあまりよく知らず、崔教授ともこのときが初対面でした。これまでほとんど交流のなかった韓国と日本の研究者がこのように近い考えを持ち合わせているというのは、やはり驚くべきことではないでしょうか。

うれしい驚きはもう一つありました。崔論文には、本書の冒頭にのせた私の二つの表がほとんどそのままの形で引用されていたからです。だがここで、ちょっとした意見のくいちがいがありました。「上の表は作成者の国民的経験を反映しているが、全体的に国民国家の構成要素と国民的アイデンティティ形成の契機をほとんど網羅した感じである」というのが崔教授のこの表に対する一応の評価です。だが崔教授はすぐに言葉をついで次のように述べる。「しかし上の表では民族主義登場の動力を説明することはできない。何故ならそれは国家の先在を前提としているからである。」（同上書、11頁）崔教授によれば、これらの条件を備えて国民国家の道を歩む国はむしろ例外であって、ヨーロッパでは英仏以外にスウェーデン、デンマーク、オランダなど、非ヨーロッパでは中国と韓国を挙げておられる。だがここにはどうも誤解が、意見のくい違いがあるようです。

まずはじめに、私はこの二つの表を、国民国家形成の条件、あるいはそれが目指す国民国家のモデルを示すものとして提示しています。つまりこれは一種の理念型、あるいは作業仮説であって、その後の私の関心はいわゆる先進諸国よりは後発諸国のナショナリズムと国民国家形成の考察に、これらの表がいかん効力を発揮しうるか、ということでした。それでこれらの表（それはいまだに試作品です）を作ってから以後の十数年間、私の勤務校である立命館大学の国際言語文化研究所を中心とした共同研究や連続講座を通じてその検証を続け（この研究所のかなり詳しい紹介が2002年12月6日の「朝鮮日報」に掲載されています）、この問題にかんする数冊の報告書を編集出版してきました。研究の対象となった国々としては、ドイツやイタリア、あ

るいは東欧を含むヨーロッパの後発諸国、中国、台湾、タイ、インドネシア、マレーシア、ベトナム、フィリピン等々のアジアの新興諸国、あるいはアフリカやラテンアメリカの新興諸国、等々があります。また出版された書物としては、『幕末・明治期の国民国家形成と文化変容』（新曜社、1995年）、『世紀転換期の国際秩序と国民文化の形成』（柏書房、1998年）、『二十世紀をいかに越えるか 多言語・多文化主義を手がかりに』（平凡社、2000年）、『ヨーロッパ統合と文化・民族問題』（人文書院、1998年）、『多文化主義・多言語主義の現在 カナダ・オーストラリア・そして日本』（人文書院、1997年）、『アジアの多文化社会と国民国家』（人文書院、1998年）、『ラテンアメリカからの問いかけ』（人文書院、2000年）、『複数の沖縄』（人文書院、2003年）、等々があります。

こうして、一貫した持続的な研究・考察を通して、確認しえたことは数多くありますが、なかでも世界の諸国は、国民国家形成がその多様な歴史的あるいは地政学的条件にもかかわらず、同じような国家装置を作り同じような国民化を行なおうとすること、これは、考えてみれば当然な、だが実に驚くべきことではないでしょうか。各国は、あるいは各民族はあたかも共通の同じ計画書を手にして、あたかも誰かに命じられたかのように、国民国家形成に専念している。また先進国よりもむしろ後発諸国の方がこの国民国家のモデルに忠実に従おうとする。解放された旧植民地は、旧宗主国をモデルにして同じような制度とナショナリズムを作りだそうとする場合が多く、それが「独立」の実態であることが次第に明らかになってきました。この驚くべき強制力、それが国民国家というものであり、国家が国際関係（国家間システム）のなかに存在するということなのだと思います。

崔教授は「民族主義登場の動力」を、主として国家間システムに参入せざるをえない（つまり国民国家モデルを受け入れざるをえない）後発諸国の困難のなかに見出そうとしているように思われます。私はこの意見に賛成です。私の用語で言えば、世界の構造化された差別と搾取のシステムのなかでナショナリズムは生みだされる。だがこの「構造化された差別と搾取のシステム」が働くのは必ずしも国家間、つまり対外的な関係に限らない。私はここで国民国家自体の矛盾を強調しておきたいと思います。一見、国民国家形成に成功したかに思える先進諸国でも民族問題をかかえていない国民国家は存在しないのではないのでしょうか。

多文化主義とマイノリティの権利の主張で注目されている、カナダの政治哲学者ウィル・キムリツカが、1998年の来日の際の講演「国民国家の未来を考える」のなかでこの問題に触れ、国民形成 *nation-building* とは結局、多数派民族による少数派諸民族の統合支配である以上、少数派民族の対抗的国民形成 *competing nation-building* を招かざるをえない、と述べて国民国家が不可避免的に民族問題を内包していることを指摘しています。私はここで一歩進めて、国民国家は民族に限らず国内におけるあらゆる差異と差別、地域（中央と地方）、階級、性差、年齢、身体健全者と病者、等々を国民統合のために利用してきたことを考えるべきだと思います。世界システム論で云う、中核と周辺に類似した搾取と差別の構造が国内でも作用しています。かつて1970年代の後半に話題となったマイケル・ヘクターの内国植民地論（Michael Hechter, *Internal colonialism*）は、グローバル化の諸現象が際立ってきた現在において、改めて検討されるべきだと思います。他方、旧植民地の新興諸国は周辺に位置づけられることによる困難とともに、国民国家が本来もっている諸矛盾を、植民地遺制という最悪の状況の下で引き受けざる

をえない。さらに、第三世界と呼ばれる周辺諸国の間にも貧富の格差が大きく、中核と周辺、つまり差別と搾取の関係がその地域内でも成立していることに注目する必要があると思います。

国民国家形成にかんする私の二つの表の明らかな欠点の一つは、植民地の位置づけ、したがって国際関係がうまく表現されていないことです。この欠陥を修正するにはどうしたらよいか、おそらく二次元の表では無理なのだと思います。もう一つの欠点は、最終的には国民国家の多様性（比較の基準がなければどうして多様性が論じられるでしょうか）の考察に役立てたいという意図があるのですが（私は200をこえる世界中の国民国家はそれだけの数のヴァリエーションだと考えています）、その意図に反して国民国家の単一性を印象づけてしまうということです。この第二の欠点を補うために、国民国家の諸類型を表わす第三の表を作ってみました。この表はある歴史学事典の「多民族国家」の項目のために作ったのですが、この事典はまだ出版されていないので活字になるのはこれが最初になるかもしれません。紙数の都合もあって説明ぬきで掲載しますが、そこから何らかのヒントを読みとっていただければ幸いです。

表1 国民統合の前提と諸要素

- | | | |
|---|--|-------------|
| ① | 交通〔コミュニケーション〕網／土地制度／租税 貨幣 - 度量衡の統一／市場.....植民地 | 経済統合 |
| ② | 憲法／国民議会／〔集権的〕政府 - 地方自治体（県）／裁判所／警察 - 刑務所／軍隊（国民軍，徴兵制）／病院 | 国家統合 |
| ③ | 戸籍 - 家族／学校 - 教会（寺社）／博物館／劇場／政党／新聞〔ジャーナリズム〕 | 国民統合 |
| ④ | 国民的なさまざまなシンボル／モットー／誓約／国旗／国歌／暦／国語／文学／芸術／建築／修史／地誌編纂 | 文化統合 |
| ⑤ | 市民（国民）宗教 - 祭典（新しい宗教の創出，伝統の創出） | |

表2 国民化（文明化）

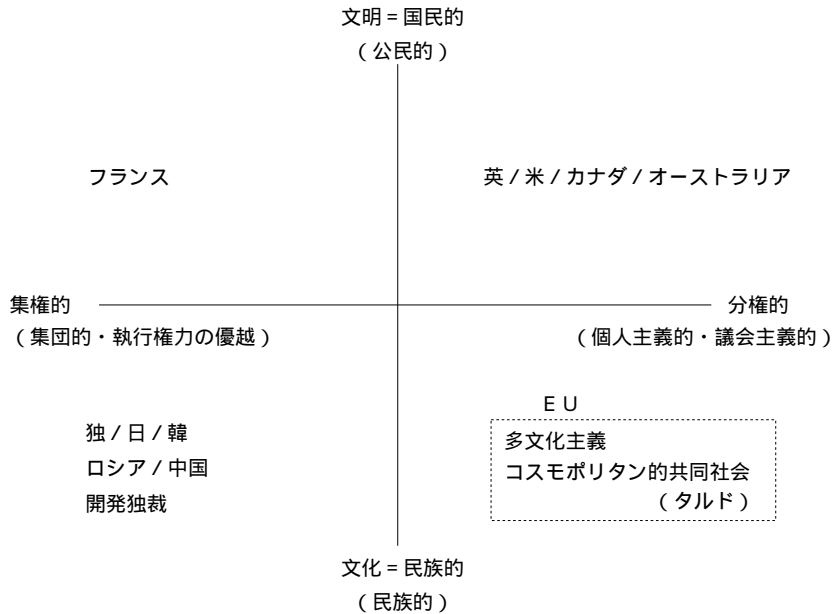
- | | | |
|---|------------------|---|
| ① | 空間の国民化 | 均質化，平準化された明るく清潔な空間／国境中央（都市） - 地方（農村） - 海外（植民地）／中心と周縁，風景 |
| ② | 時間の国民化 | 暦（時間の再編），労働・生活のリズム／神話／歴史 |
| ③ | 習俗の国民化 | 服装，挨拶，儀式（権威 - 服従）／新しい伝統 |
| ④ | 身体の国民化 | 五感（味覚，音感，.....），起居，歩行 - 学校・工場・軍隊等々での生活に適應できる身体と感覚／家庭 |
| ⑤ | 言語と思考の国民化 | 国語／愛国心 |

ナショナリズム

国民の誕生

表 3

国民国家の諸類型



3

李得宰氏の書評は、私の書物のなかに、他の研究者や思想家の与えた影響をさぐることにかなり力をこめておられるようですが、著者の側から見ると、それは当たっている場合もあり、かなり見当違いな場合もあるように思います。「国民化の回路」という用語は御指摘のように、確かに牧原憲夫さんが立命館大学の講演で使った用語で、私は牧原さんほうまいことを言うな、と感心したことを覚えています。本書所収の小論「国民化と時間病」で私はそのことに触れ、「国民化の回路」とは別に「脱落の回路」あるいは「非国民化の回路」があるのではないかと書いたのは、牧原さんへの口惜まぎれの応答であり、それはそのようなものとして牧原さんには正確に受け取ってもらえたと思います。

この講演会は立命館大学で国民国家形成に焦点を定めて行われた最初の共同研究の成果である『幕末・明治期の国民国家形成と文化変容』の出版を祝って行われたものですが、もう一人の講演者は河野健二先生であったことがなつかしく思い出されます。河野先生はその講演の冒頭で、「西川さんとは長い間いっしょに仕事をしてきたので、どこまでが自分の考えでどこからが西川さんの考えか、いまではよく分からなくなってしまった」とおっしゃいましたが、これは私にとって大変なほめ言葉でした。私は専門が違うので（経済学部と文学部）、河野先生の授業を受けたことはありませんが、先生の大学院のゼミに長年参加させていただいて、ルイ・アルチュセールの著作をいっしょに読み、また先生が京都大学人文科学研究所で主宰された共同研究「フランス・ブルジョア社会の研究」「ブルードン研究」「ヨーロッパ1930年代」等々に続

けて参加させていただき、多くのことを学びました。本書に収められた『戦後社会思想の転換 河野健二著「近代を問う」を読む』は、そうした学恩に対する感謝をこめた渾身の書評ですが、いくつかの見解の違いも明記されており、その意味では厳しい批評になりえていると思います。先生から早速、長文の感謝の手紙がとどき、最後に今後、議論を続けるべきことが記されていましたが、その直後に先生が病気で急逝されたため、この約束は実現しませんでした。御指摘のように、イマニュエル・ウォーラーステインの名を初めて知ったのは河野先生の御教示によるものです。だがその後、先生とウォーラーステインについて話し合った記憶はありません。

国民国家論あるいは国民国家の批判的研究にかんして、即座に欧米の先駆的な研究者の数多くの名前を挙げることは可能でしょう。ある有名な教授が教室で私の仕事にふれて、日本で最初に欧米の国民国家論を紹介した偉い先生ですというようなことを言ったことを伝え聞いたのですが、たとえ好意的であったとしても、私にとってはとんでもない話です。私の国民国家論は、アンダーソンやウォーラーステインと出会う前から始められていますし、おそらくこの二人の著作がなくてもほぼ同じ形をとったと思います。私の国民国家批判の原点というか出発点は、李氏もご指摘のように、私自身の戦争 戦後体験ですし、あえて言うなら、私の生れる以前にも、例えば幸徳秋水（彼の『帝国主義論』は愛国心批判です）や大杉栄（『日本脱出記』）等々、国家権力と闘い、その反国家主義ゆえに国家権力によって殺害された無数の「非国民」たちの無念の亡骸が延々と埋められており、その発掘の作業はまだ十分に進められていません。

また国民国家論の構想の理論的な側面にかんして言えば、誰よりもまず、マルクスとブルードン、そしてルイ・アルチュセールの名を挙げなければなりません。マルクスの『共産党宣言』（グローバル化の最初の理論でもあります）と『資本論』、そして何よりも『ルイ・ナポレオンのブリュメール18日』を中心としたフランス三部作（マルクスの新しい国家論の試み）。この領域にかんする私の最初の著書『フランスの近代とボナパルティズム』（1984年）は、マルクスの新しい国家論の出発点となるフランス三部作をフランスの現在の歴史学の実証的な研究の成果と比べながら批判的に分析・解釈するといった作業を中心に書かれています。マルクスとブルードンという組み合わせを意外に思われる方も多いと思います。だがこの相対立する同時代の思想家は、ともに科学的社会主義を唱え、ともに「国家の死滅」を主張していました。私はかつてこの二人の国家論を綿密に比較分析して長い論文を書いたことがあります（「反国家主義の思想と論理」（河野健二編『ブルードン研究』1974年、所収）。共産主義とアナキズムというレッテルをはがして冷静に読めば、この両者はナショナリズムと国民国家建設という十九世紀の同じ現実のなかで、互いにきわめて近い反国家主義の理論を展開しているのです。

アルチュセールは御承知のように、フランス共産党の内部でフランス共産党の古い体質と闘いながら、マルクス主義の再定義とマルクスが途中で放棄した国家論の理論構築を試みた哲学者です。私が1972年に訳出した「イデオロギーと国家のイデオロギー装置」（『思想』8,9月号）は、これまで政府、行政機関、軍隊、警察、裁判所、等々といった公共の領域に属する国家の抑圧装置にしか関心を示してこなかった国家理論に対して、宗教的、学校的、家族的、法律的、政治的、組合的、情動的、文化的、等々の、これまで私的領域に属するものとされてきた諸制度を「国家のイデオロギー装置」として設定することによって、国家理論に一大転換をもたら

した記念すべき論文でした。アルチュセールのこの国家装置（抑圧装置とイデオロギー装置）の表を御覧になった方は、私の国家装置や国民化にかんする表が何に由来しているかを直に理解されることと思います。ただし私のこの二つの表や国民国家論は、単にアルチュセール理論の応用だけではなく、一般的な国家理論から直ちに自国のナショナリズムや共和政批判に向おうとしないアルチュセールに対する批判をこめたものでもありました。アルチュセールのこの論文は当時アルチュセールが計画・執筆中であった二巻にわたる大著（「再生産論」）からの要約・抜粋から成っており、アルチュセールの没後かなり大量の草稿が残されました。私はいま数人の若い友人たちとその草稿の翻訳を進めているのですが、アルチュセールが中断せざるをえなかった理論的探求のあとを私たちが引継ぐことができるかどうか、私にとっては重要な問題です。

私は、アルチュセールの場合は図らずも日本導入の初期からかわってしまいましたが、自分の一般的な傾向としては、外国から輸入される先端的な理論や文学にはなるべくかわらないようにしてきました。それはおそらく、サルトルやカミュからブルデューやデリダに至るまで、先端的な文学や理論の移入にとりわけ熱心な（東京と京都ではかなり異なりますが）フランス文学研究者たちの間に身を置いて、その知的植民地主義的な状況にうんざりすることが多かったからだと思います。韓国の事情は知りませんが、これはおそらく後発の国民国家に共通する悲しい状況だと思います。それで私はジャーナリズムや学界で話題となるような先端的な著作については、少なくとも五年か十年は書いたりしゃべったりしないようにしようと秘かに心に決めています。もっともこれは自分の無知や怠惰を隠す口実でもありますが。

ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』やホブスボウム＝レンジャー編の『創られた伝統』は熱心に読んで、だがそれについては流行が終るまでしばらく口を閉ざしておきたいと思った書物です。『想像の共同体』は実に興味深い書物で私は多くを学びました。特に1991年に出た増補改訂版に加えられた新たな章は、クレオールの問題や歴史、あるいは国家のイデオロギー装置にかんする考察が多く、私の用語で言えば国民国家論的な色彩が強くなっています。私が初版の注の一行をもとに「モジュール」の概念を強調したのは、それをこの書物から取り入れたというよりは、むしろそれを強調することによってこの書物の別様の解釈ができるのではないかという、一種の批判的な意図がありました。モジュールを国家装置に読みかえることは可能でしょう。またアンダーソンの見事な分析は結局ネイションをどこに導こうとしているのでしょうか。私はそこにナショナルなものの根底的な批判と否定を読み取ろうとしているのですが、アンダーソンの方向はどうやら逆のようです。

ウォーラステインもしばらく口にしないように心に決めた名前でした。ところが、ウォーラステインの来日に際して、名古屋大学でのシンポジウムに招かれてウォーラステインを前にかなり批判的なウォーラステイン論を一時間近くもしゃべったり、ウォーラステインを立命館大学に招いたときにはそのコメンテーターを務めたりするようなことがあって、そうもいけなくなりました。ウォーラステインの世界システム論は世界資本主義論ですから、マルクス主義理論の強い影響を受けた私たちの世代にとってはかなり受け入れやすいものです。河野健二がウォーラステインに興味をもったのは、京都大学人文科学研究所では世界資本主義の共同研究が行われ、その成果である大部の二巻本（河野健二、飯沼二郎編『世界資本主義

の形成』『世界資本主義の歴史構造』岩波書店，1967，1970年）もすでに出版されていたので，アメリカで自分たちと同じような理論を述べている人がいることを伝え聞いてのことだったと思います。現にその当時の共同研究のグループでは，世界システム論のプライオリティーは自分たちにあると主張している人がいますが，これはあながち強弁とは言えないでしょう。ついでながら御高論には「彼らの議論では，「資本」の問題設定が欠けている」という一節がありますが，この批判は西川には当てはまるとしてもウォーラステインには当てはまりません。経済学者・社会学者としての彼の主要な関心事は，資本であり世界資本主義なのだから。

したがって私のように，ウォーラステインの中心的課題ではない国家間システムの側からの彼の仕事を見ていこうとするのは，無いものねだりのなところがあり，あまりフェアな態度だとは言えないかもしれません。しかしながら，アンダーソンの「モジュール性」の場合と同様，そこに私の批判があり，同時にこちらの方をもう少し展開させてほしいという私の願いがあったのです。御高論を読むと，何か私がウォーラステインを引き写しにしているような印象を与えますが，それは間違いだと思います。「構造化された搾取と差別のネットワーク」という表現は引用ではなく，世界システム＝国家間システムの私なりの要約ですが，そこにはウォーラステインはもっと住民の搾取や差別の問題に深入りすべきだという，私の批判と願望がこめられているのです。あるいは私はこちらの方をやりますよ，という私の意志表示でもあります。

ウォーラステインにかんしては，彼のテキストをしっかりと読まないで敬遠する，イデオロギー的嫌忌がかなりひろがっているような気がします。私もウォーラステインをとりまくある種の宗派的な雰囲気を感じてちょっとした違和感をもったことがあります。しかし，このスケールの大きな理論的探求から学ぶことはまだ多いし，彼の時事的な発言にも耳を傾けるべきことは多い。また私は彼が，社会主義は終わったといわれる時代の中で，いぜんとして社会主義的な理想を追求し続けてきたことにも共感します。ウォーラステイン理論に対する私の根本的な批判は，彼がアフリカでのフィールドワークを体験したりラテンアメリカの従属理論を取り入れたりしているにもかかわらず，やはりその理論（世界システム論）は西欧中心であることを免れていないということです。この欠陥はすでにマルクスにおいて否定しがたく露呈していました。私はマルクスの「インド論」を分析して批判的な文章を書いたことがありますが，「インド論」におけるマルクスの論議は，当時のイギリスやヨーロッパの植民地主義者と見まごうばかりです。その根本的な理由はマルクスが西欧的な「文明」概念を共有していたことにあるというのが私の結論でした。欧米の言説がどれほど西欧中心であるかを測る，手早くしかも正確な方法は，そのなかの「文明」概念のテストであるというのが私の持説です。「文明」は資本主義と国民国家のイデオロギーを支える基本概念ですから。ウォーラステインはかなり後期になって文明概念の分析に手をつけていますが，あまりうまく行っているとは思えません。

御高論で私の国民国家論に対する批判の理論的より所となっている，ネグリとハート（『帝国』）は，引用されているドゥルーズとガタリ（『千のプラトー』）同様，それにかんしてはもうしばらく口を閉ざしていたいと思っていた名前でした。もう一人，私が完全に口を閉ざしているのが李得宰氏もおそらく見落された大きな名前としてフーコーがあります（私の国民国家論とフーコーの理論を比較して論文を書いてくれた人もいます）。私がこれらの名前に口を閉ざしているのは，もちろんそれらを軽視しているからではなく，むしろ尊敬しているからです。『帝国』

にかんしてはおそらく李氏と私の読みの間に大きなひらきがあると思います。私がこの著者に共感をもつ一つの理由は、彼らがマルクス主義者であることを自認して、マルクス主義理論の現代的な展開を図っていることです。彼らのポジションを示す良い文章があったので、少し長くなりますが次に引用させていただきます。最後には国民国家にかんする言及もあります。これはダニーロ・ゾーロとの対話で、ゾーロが現代におけるマルクス主義の無効性を主張したのに対する回答です。

反対に私は、マルクス主義を復活させたいと思っている。マルクス主義は私にとって、継続的に闘うことで近代を縦断した批判的潮流の要約的表現として近代的唯物論と同義語なのだ。マキアヴェッリからスピノザ、そしてマルクスへの至るラインだ。私にとってマルクス主義の復活とその刷新は、キリスト教の歴史の最初の数世紀に教父神学的護教論が持つ強い意味を持っている。マキアヴェッリがああ言い方に与えた意味で「原理に帰れ」ということだ。この方向で機能するために重要なのは、マルクス主義理論の幾つかの基本点にそって前進することだ。つまり、歴史の弁証法に抗して目的論的でない階級闘争論を構築すること、労働価値説を超えて、資本への社会の実質的（完全な）^{スズンツイオーネ}包攝^{ヴァロリザツィオーネ}という時代にあつて＜一般的知性＞をつうじた価値実現化の分析、そして国家論に関して言えば、肝心なことは、（経済的なものと政治的なものとの一致としての）主権と、搾取の行使、同様に主体的個人の諸権利の欺瞞と破壊の行使の中心的モメントとして把握することだ。マルクスは、いくら提案したといっても、階級闘争に関する本をわれわれに残していないし、特に国家に関する本を残していない。実際に国家に関する本は、『資本論』にはないし、主権のスペースが世界のように大きくなってはじめて、したがってまた、マルチチュードを＜帝国＞と対照させることが可能になったときにはじめて、その本を書くことができるのだ。国民国家、これについてマルクスは語ることができただけだったが、国民国家は中世と近代の結び目であった。資本主義の発展そのものがその結び目に切り込みを入れるのは困難であった。ひとり国際的および国際主義的プロレタリアートだけが国家の問題を自らに提起できたのである。（アントニオ・ネグリ著、小原耕一、吉澤明訳『帝国をめぐる5つの講義』青土社、2004年、30頁）

『帝国』を読んだ私の最初の感想は、この著者たちはマルクスの忠実な弟子であるだけでなく、ヨーロッパ哲学の正統的な後継者であるというものでした。そしてその分だけいまだ西欧中心的な思考から免れていないと思います。アメリカが帝国になりうるか否かは別として、彼らの視野の中心はやはりアメリカとヨーロッパであつて、日本や韓国や、あるいはその隣に存在する巨大な中国や巨大なインドは、ましてやその他の非西欧地域は彼らの視野の周辺に影薄く存在するかあるいは存在しない。それはマルチチュードについても同じだろうと思います。もしこれらの周辺から、つまり非西欧地域の「われわれ」から「帝国」やマルチチュードを構想したら、それはどのようなものになるのでしょうか。それが私の関心事です。

4

したがって、「国家間システムから帝国論へ」という李得宰氏の論理展開には私は必ずしも全面的に賛成することはできません。それは流行語は可能な限り使いたくないという私の天の邪鬼的性格にもよりますが、上に述べたようなネグリとハートの『帝国』に対する疑問もあつて

のことです。さらに「帝国」という用語へのこだわりもあります。ローマ帝国をはじめ人類史上、無数の帝国がありました。最近ではいぜんとして帝国主義の帝国が問題となっている一方で、ヨーロッパ連合にかかわって「新しい中世」や「帝国」が問題になっていました。そして現在アメリカのまさしく帝国主義的帝国が再現している一方で、ネグリの帝国がひろまっている。こうした状況のなかで帝国という用語の使用にはよほど注意が必要であるし、同じ問題を帝国という用語を使わないで議論をしてみることも必要ではないのか。もちろん新しい帝国概念を積極的に打ちだしてそれを展開してゆく試みに反対ではありませんが、そのためにはいろいろ予備作業や準備が必要でしょう。

『帝国』の立場からすると、西川長夫の国民国家論のゆくえはどのように説明されるだろうか。この点において、西川長夫が理論的に依拠しているウォーラステインの立場が問題になる。西川長夫はウォーラステインの立場をあちこちで繰り返し引用しつつ、忠実にその線に沿って議論を展開しているが、・・・

私はこの文章を読んで大変驚き、また深く反省しました。まず冒頭の「『帝国』の立場からすると・・・」という文章。「『帝国』の立場」とは何を意味するのか、それまでに『帝国』の立場についてほとんど説明がありませんから、私が理解、というよりは推測しえたのは、韓国の知識人の間には、それほど『帝国』が読まれ、「帝国」概念が一般化しているのであろうということです。それに続く文章には一層驚かされました。「この点においては、西川長夫が理論的に依拠しているウォーラステインの立場が問題になる・・・」。私が驚いたのは、私にはウォーラステインに理論的に依拠しているという意識が全く無かったからです。私はウォーラステインを自分の説を補強するものとして援用しているにすぎないからです。それに、これは著者に対してたいへん失礼な文章ですね。著者ではなく引用されているウォーラステインの理論が問題になるというのですから。それに続く文章を読んで私は唖然としました。「西川長夫はウォーラステインの立場をあちこちで繰り返し引用しつつ、忠実にその線に沿って議論を展開しているが、・・・」。私の文章がこのように理解されうるとするのは私にとってはたいへんな驚きです。私はウォーラステインを擁護したり、批判したり、あるいは助けを借りたりしたことはあるが、忠実にウォーラステインの線に沿って議論したことはこれまで一度もなかったはずです。日本でこのような批評が出ないのは、おそらく私がそれまでに発表した文章や、私の日常の言動から私のウォーラステインに対するスタンスがある程度知られているからでしょう。

だがそういうコンテクストの無いところでは、私はまるでウォーラステインのエピゴーネンと思われても仕方がないような文章を書いてしまっていた！これは私の深い反省につながります。そう指摘されてみれば、この一冊に集められた論考には、たしかにアンダーソンやウォーラステインからの引用や言及が多いのです。どうしてそういうことが起きたのでしょうか。今にして思い出されることの一つは、この時期、私は口に出すことを自分に禁じていた名前に言及することを解禁したのだと思います。また国外に出て講演するときには（国内でも同じことですが）、よく知られていない自説をくたくたと述べるよりは、有名な人の名前を出した方が

わかりは早いし、評価もされやすいということもあったと思います。だがこれは墮落の始まりでした。単に労力を節約するというだけでなく、そこには読者におもねる心や一種の知的スノビズムがそこに働いていたのかもしれない。

以上は私の反省ですが、李氏の読解が間違っているということも強調しておきたいと思います。同じような例がまだあります。「国民国家を支えていた社会主義と自由主義という二つのイデオロギーが1968年に消滅したり、1989年が世界の国民国家と国家間システムの再編にとって決定的な年だったという話もウォーラステインの臭いが感じられる言葉である。」もし翻訳が正しければ、これも何か悪意を感じさせる文章ですね。それが何に由来するのかを私は考えあぐねています。「ウォーラステインの臭いが感じられる」という表現は適切ではありません。ウォーラステインはそのように言い、それが彼の見解であることを私は明記しているのですから。

1968年にかんしては、私は本書の次に出した書物（『フランスの解体？ もうひとつの国民国家論』1999年）のなかで詳しく論じています。私は1967年10月から69年9月までパリのソルボンヌ大学に在学していたので、68年のいわゆる五月革命を内側から見ることができました。それは私の革命観と人生観を根本から変えるような事件でした。私がある五月革命論でウォーラステインを援用したのは、内部で体験された歴史的イベントと外側から考察された理解との対照を示すことが一つの目的でした。ウォーラステインのこの試論は外からの分析としては非常に優れたもので、内的な理解とは異なるが、私の文章の客観性を保証してくれる性質のものでした。ただし社会主義と自由主義は直ちに「消滅」したりはしないのでこの要約は正確ではありません。いま気がついたことですが、私がウォーラステインを引用する場合は、このようなタイプの引用の仕方が多いようです。

1989年の夏は、私はソルボンヌ大学で開催される革命二〇〇年記念世界学会に参加するためにパリに滞在して、サミットに参加するためにパリに来てソルボンヌ大学を訪問したゴルバチョフを垣間見るようなことがあって、学会での各国の研究者の報告と考え合わせて、ベルリンの壁の崩壊から始まるその後の事態の展開がきわめて印象深かったことを覚えています。今年の3月、私は調査旅行で初めてベルリンを訪れて、ベルリンの壁の跡地やトルコ系移民の居住地を見てまわったのですが、壁の跡地に先進諸国の大企業がひしめく巨大な開発現場を目にして、ベルリンの壁を崩壊させたのは究極的には資本、つまりグローバル化の力であったということを実感しました。私は1989年が国家間システムの再編にとって決定的だというウォーラステインの説に賛成で、そのことは本書の後に書きたいいくつかのグローバリゼーション論でもくりかえしています。ただし1989年が決定的な年であるということはウォーラステインを引き合いに出すまでもなくかなり一般的な見方ですし、ここでウォーラステインの独自性は1968年と89年を結びつけて考えていることだと思います。

「国家間システム論から帝国論へ」と題された節の御高論のなかには、私がどうしても理解できない文章がありました。例えば次の文章とその後に続く長い文章。「西川長夫は著書の他の部分で世界システムを「中核 半周辺 周辺という地球規模の搾取 被搾取の関係（106-7）」として理解している。しかし、こうした世界システムについての理解は西川長夫が「構造化された差別のネットワークの中での国民国家の相同性」を述べる瞬間、無意味なものになる。」どうして「無意味になる」のか私には理解できません。どこが問題なのでしょう。もし「相同性」

が問題であるとするれば、国家装置の説明ですでに述べたことですが、おそらくそれは、国民国家が国家間システムの中に位置づけられるためには同じような制度や装置をもたざるをえないということでしょう。そして同じような構造をもった国家がシステムの中で位置づけられて搾取 被搾取，差別 被差別のネットワーク（関係）を形成する，これは国家システムあるいは世界システムの中では全く当然のあたりまえの記述であって，どうして「無意味になる」のが私には全く了解不可能です。

またそれに続く文章も同様です。同じ国家間システムの中で，覇権国の交替やあるいは国家間の順位が変わってもシステム自体は変化しないし，むしろそのシステム内の国家間の競争はシステム自体を強化する，という説に対して次の批判が続きます。「「覇権国の移動はあっても国家間の不平等という世界システムの構造自体は変化しない。(107)」ならば，システム全体の变革はいかに可能だというのか。こうした論理の延長線上では，西川長夫の国民国家論において提起されている国民化の回路や人が国家へ回収される過程や回路自体も構造化されたネットワークの中に位置づけられる以上，互いに似た形になるという具合に聞こえる。」・・・ここまで来て，私は私の国民国家論はその最も本質的な部分で理解されていないのではないかという恐怖に似た感情にとらわれました。「互いに似た形になる」 そうです，その通りです。韓国でも台湾でも日本でもベトナムでもインドネシアでもあるいはアメリカでもフランスでもドイツでも，あらゆる国民国家で同じような国家装置が作られ，同じような教育が行われて愛国心が鼓舞され，国益を求めて戦争を行ない，あるいはさまざまな形の差別や搾取や植民地化が行われ，殺人や虐殺や環境破壊が，国益と国民の名誉のために行われる。それこそが問題なのです。「ならばシステム全体の变革はいかにして可能だというのか」 システム全体の变革は，搾取 被搾取，差別 被差別といったシステム自体の矛盾から起こるはずです。戦争や環境破壊や余剰価値率の低下はシステムの自壊を招くはずです。また搾取され，差別され，抑圧されてきた人々がやがて反抗に立ちあがらないはずはない。それは世界中で現実に行っていることではないでしょうか。

私たちの議論が世界システム=国家間システムや帝国といったシステムの問題で終るのは，私にとっては意外であり，いささか不満です。私ははじめ，韓国の歴史的現実や韓日関係の現実から生みだされる，私にとっては盲点をつくような問いが出されることを予想して，半ば期待し半ば恐れていたからです。もっとも実際はそういう問いが出されていて私が気付いていないのかもしれませんが。もちろんシステムの問題が重要で興味深い問題であることを否定するつもりはありません。李得宰氏の批評のおかげで，私は自分の思考=執筆の方法について初めて反省的に考える機会を与えられました。私の方法はどうやら二重か三重になっており，それが誤解を招く原因にもなっているようです。第一は大状況にかんする関心，これはマルクス主義や世界システム論やあるいは帝国論など，システム論の援用という形をとっている。第二は歴史的な位置づけ。これは大状況を理解したいという願望にもつながりますが，実証的なより細部への関心にもつながっている。第三は，これが私の方法の一番の核になっていると思いますが，内面，つまり国民化された，精神をも含めた身体への関心です。自分の内面，身体や感覚を通して納得したものしか書かない，という原則を私は守っているつもりです。

この三重化された私の方法がいちばん良く示されているのは，本書では「国民化と時間病」

と題された短いエッセーだと思います。李氏はそこに引用されたウォーラーステインに注目されましたが、この試論で一番重要なのは私の「不眠症」です。私は中学校時代から今に至るまで不眠症に悩まされてきましたが、それは時に自殺したくなるほど苦しいものです。だが私はこの文章で時間の国民化を内面から照らし出す一種のフィクションとしてもそれを使っています。この文章は雑誌『文学』の「時間論」特集号のために書いたものですが、輸入物の時間論や日常生活から遊離した抽象的、観念的な時間論が並ぶのに我慢できなくて、あえてこういうテーマと書き方を選んだのです。ここで世界システム論が出てくるのは、私的な問題を大状況のなかに位置づけて客観化を試みるという意図もありますが、一個人のひそかな悩みである不眠症と世界システムという大げさな議論とのコミックな対照を狙う意図もありました。これは私的な深刻さと公的な深刻さの双方から逃れて、思考する精神の自由と柔軟性を保持する一つの方法でもあると思います。

こうした私の方法は、いわゆるオルタナティヴにかんする私の態度にもかかわっています。私は社会主義にしろ自由主義にしろ、あるいは世界システムであれ帝国論であれ、未来の青写真には信じません。予測不可能な思いがけないものが出現するのが歴史というものではないでしょうか。世界システムがどう変わるかという問題を考えることも重要ですが、私は何よりも私の置かれた場で、自分自身の問題としてそれを考えたいのです。そういう意味で李得宰氏が御自分の国民化の体験に即して、私の本の書評に「非「国民化」の回路はいかにして可能か」というテーマを出していただいたことに改めて感謝したいと思います。最後に恐縮ですが、この本の最後のページに記された私の文章を引用して、この手紙を終わらせていただきます。

では今われわれに何ができるでしょうか。とりあえず考えられるのは国民国家がゆらぎつつある時代の変化を考察する視座を国家の呪縛、つまり国家イデオロギーから可能な限り離れた地点に設定するための工夫と努力をすること。そしてそこから世界の変化と同時に、われわれが国家に回収される無数の回路をしっかりと見極め、その回路から身をずらすための工夫と努力をすること。そしてその地点から見出されるさまざまな搾取や差別に可能な限り異議申し立てを行うこと、ではないでしょうか。「新しい社会運動」をそのような文脈の中で考えたいと思います。そのような工夫と努力の結果として自分が少しずつ変わってゆき、それに応じて新しい世界が少しずつ姿を見せてくるのであって、まことらしい予言や代案には用心した方がよい。いま私に言えるのはそんなことでしかありません。

2004年8月27日

李 得 宰 様

西川 長夫

P.S. この手紙に記した私の意見の多くは、二年前に出た拙著『戦争の世紀を越えて グローバル化時代の国家・歴史・民族』（平凡社）にもう少しくわしく書かれています。また『国民国家論の射程』よりも前に出版された『増補国境の越え方 国民国家論序説』と『地球時代の民族=文化理論 脱「国民文化」のために』の韓国版が今年中には出るようなので御参照いただければ幸いです。